

「ドン・ジョン」 ★★★

2014 (平成26) 年3月1

7日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本：ジョセフ・ゴードン＝レヴィット

ジョン「ドン・ジョン」・マテロ Jr. / ジョセフ・ゴードン＝レヴィット

バーバラ・シュガーマン (一目惚れした女性) / スカーレット・ヨハンソン

エスター (年上の女性) / ジュリアン・ムーア

ジョン・マテロ Sr. (ジョンの父) / トニー・ダンザ

ポビー (ジョンの遊び仲間) / ロブ・ブラウン

アンジェラ・マテロ (ジョンの母) / グレン・ヘドリー

モニカ・マテロ (ジョンの妹) / ブリー・ラーソン

ダニー (ジョンの遊び仲間) / ジェレミー・ルーク

2013年・アメリカ映画・90分

配給/KADOKAWA

◆本作の主人公ドン・ジョンことジョン・マテロ Jr. を演ずると共に、本作で初監督を務めたジョセフ・ゴードン＝レヴィットは、何となく顔は知っていたが、名前と顔が一致するほどの存在ではなかった。しかし、女たらしのプレイボーイであると同時にポルノ大好き人間で、毎日自慰行為にふけているという主人公と共演するのが、色気タップリでチョー魅力的なバーバラ・シュガーマンを演ずるスカーレット・ヨハンソンと、ちょっと年増の女性エスターを演ずるジュリアン・ムーアだとわかると、つい観ておかなかくっちゃとなってしまう。

ジョン・マテロ Jr. がドン・ジョンと呼ばれているのは、あの女たらしの「ドン・ファン」にちなんでのことらしい。ドン・ジョンは週末にはきちんと家族とともに教会に通っているが、そこで神父に懺悔するのはポルノを鑑賞しながらの自慰行為の回数と、婚前交渉の回数ばかりだ。友人のポビー (ロブ・ブラウン) やダニー (ジェレミー・ルーク) と連れだっただけのクラブ通いと、そこでの女の「品定め」、そして気に入った女の「お持ち帰り」は夜毎のことだが、ある日ドン・ジョンの目にとまったとびっきりの美女がバーバラ。したがって、本作前半のストーリーの軸は2人の出会いと恋模様の展開になるが、そこにエスターはどう絡んでくるの？

◆「女たらしのプレイボーイ」と言えばあまりイメージはよくないが、ドン・ジョンの場合はそれに耐える体力 (精力?) を維持するためのジム通いはもちろん、車も部屋も自分流にキチンと手入れしているし、父ジョン・マテロ Sr. (トニー・ダンザ)、母アンジェラ (グレン・ヘドリー)、妹モニカ (ブリー・ラーソン) との家族生活も大切にしている。さらに、その鍛えられた身体の上で甘いマスクときているから、ドン・ジョンは女をいくらでもモノにすることが可能。ところが、どうもドン・ジョンにとってはホンモノの女よりポルノに出てくる女の方が格別にいいらしい。そこらあたりの男心 (?) や男の性のあり方は女にはわかりにくいかもしれないが、本作を観れば、男女を問わずその方面の学習ができるはずだ。

ドン・ジョンがバーバラに一目惚れしたのは、もちろんそのセクシーな容姿がポイント。いつものようにアタックし、いつものように意気投合し、いつものようにお持ち帰りでベッドイン……。ドン・ジョンはそう考え、そう行動したが、意外にもバーバラのガードは堅い。これは一体ナニ? そう戸惑いつつドン・ジョンはバーバラへのアタックをくり返したから、ひょっとしてこれはホンモノの恋……?

◆厳格なカトリックの家庭では女の子の教育も厳格だから、見た目のセクシーさとは裏腹に、婚前交渉はダメ、せいぜいキスまで、友人への紹介や家族への紹介も済まない間にエッチするなどもつてのほか。そんな風に思っている女の子が多いらしい。本作前半から中盤にかけては、そんな保守的な思想の持ち主であるバーバラに対して、ドン・ジョンが人が変わったように真面目にアタックしていく姿が面白くかついじらしい。

そんな甲斐あって、今日は念願のベッドインへ。しかも、これはほとんどバーバラからのお誘いのようなものだから、ドン・ジョンの喜びはひとしおだ。そんな有頂天な気持ちでコトに及んだが、いざ終わってみると、所詮現実の女は現実の女。ドン・ジョンにとっては最高の状況設定下で最高のポルノを鑑賞しながら自慰行為にふけるほどの快感はなかったらしい。しかも、コトが終わった後一人で秘かにポルノを鑑賞している姿がバーバラに見つかってしまい、激怒されたから最悪!! 何とかその場は言い訳でしのぎ、二度とポルノは観ないと誓約することによって事態は収まったが、さて……。

◆本作中盤から登場してくるジュリアン・ムーア演ずる年輩の女性エスターは、ドン・ジョンが通う大学の学生らしいが、一人で泣いている姿を見ると何かいわずに因縁がありそうだ。もちろん、ドン・ジョンにとってこんな年増女はまったく興味がなかったが、ドン・ジョンが自宅で厳禁となったポルノを授業の合間にスマホで観ていたところをエスターに発見されたところから、エスターの方から急接近。男なら誰でもポルノを鑑賞するくらいは当たり前。そんな話すら通じないバーバラと違って、エスターの方は積極的にドン・ジョンのポルノの話題に乗ってくる他、ある日には人気ポルノのプレゼントまで。ポルノに対する理解度や許容度は女によってこんなに違うの? 改めてそんなことに気づいたドン・ジョンは、以降少しずつエスターの話を聞くようになったが、そんな中、ドン・ジョンの変化は……?

◆エスターの涙の原因は、つい最近夫と子供を失ったためだったそうだが、そんなエスターとドン・ジョンとの年齢差はかなり大きい。ドン・ジョンにとって理想の女性と思われたバーバラは、ドン・ジョンの両親にとっても理想の女性だったので、ゆくゆくは結婚までと考えていたらしい。ところが、自分に隠れてドン・ジョンがポルノを観ていたことがわかると、バーバラは激怒し、あっさりドン・ジョンの前から姿を消してしまうことに。

バーバラに比べるとエスターの方は冴えない年増女だが、ある日意を決してドン・ジョンがエスターとエッチしてみると、これが意外にグッド! それは、ドン・ジョンが今まで相手にしていた生身の女性は、バーバラを含めてすべてセックスの「対象物」に過ぎなかったが、エスターとのセックスは「共同作業」だったためだ。なるほど、なるほど。初監督作品となる本作で、ジョセフ・ゴードン＝レヴィットはそんな男の心理と生理を見事に演出し、かつ俳優としてもそれを見事に演じている。エスターとのセックスシーンをあまり露骨に見せると、いい年になっているジュリアン・ムーアの「アラ」が目立ってしまうが、そこらの「露出度」もうまくコントロールされているから、エスターとのセックスの魅力がバーバラとのセックス以上らしいことについては、それなりの説得力がある。

ラストに向けては再度バーバラがドン・ジョンの前に登場し、ひょっとして2人の仲が復活……。そんな風に思えるシーンも登場するが、さて、ジョセフ・ゴードン＝レヴィット監督が描き出すラストは? それは、本作冒頭に見るドン・ファンまがいの女たらしドン・ジョンの生き方・価値観とは大きく異なるものになっているから、それに注目。男にとって、性の指南役がいかに重要かということを実作で学んだ男も意外にたくさんいるのでは……?